

人と火と

登場人物 女／女優

男1／演出家

男2／街を褒め称える男

男3／街を憎んでいる男

男4／犯人を追う男

男5／市長だった男

秋。

夕方。

辺りは山に囲まれた丁字路。

女が大きな荷物を持ってやってくる。

女 ヤダ、まただわ…。どうしてなのかしら…。どうしてまた道が分かれてるの？街までは一本道はずなのに…。やっぱりさっきの道は「狭くて暗い方」を進むべきだったのかしら…。

続いて男1がやってくる。大きな荷物を持っている。

女、道の真ん中で地図を開いて、

女 川はあったのよね、そして目の前には山…。なんとなく合ってるような気はしてるんだけど、どうしてここで道が分かれてるのかしら…。

男1、道を外れた場所に荷物を置いて、腰を下ろす。

女 最初この地図を見た時、なんて簡素な地図なのって思ったんですよ、ほとんど目印らしきものが無いから。そしたら本当に目印が無い場所なんだから、困ってしまいますよ。

男1 君に地図を渡すんじゃないかかったよ、やっぱりこうなるんじゃないか…。

女 先生が見たくないとおっしゃったんですよ。そんなこと言うなら見てくださいよ。

男1 今更見たってわからないよ。最初が間違ってたからそれからずっと間違ってるんだから。最初が違っのに途中から合ってるなんて事は絶対ないんだからね道ってやつは。

女 (スマホを見て) ああ、電波も入らない。もう日が暮れちゃうわ。約束の時間に合つかしら。

男1 もういいんじゃないのかな別に行かなくても。

女 そういう訳にはいきません。

男1 僕はもうめんどくさくなっちゃった。

女 ダメですよ、仕事なんですから。

男1 まったく…。良く平気だな君は。いいかい、君の方が先にもう無理って言ったんだか

らね、「もう無理」って。それなのにこの先ひと月も一緒に創作活動なんて、そんなの出来るわけないでしょう。もうやめましょう。

女 先生、公私混同はしないとおっしゃいました。

男1 うん、公私混同なんかしてないよ。単純に、この仕事か、めんどくさいなあって思えて来ただけだよ。気がつけばそうだ、頭がぼんやりするんだ。熱があるかもしれない。そう思ったらあれだ、目もぼんやりしてきたよ。

女 夕方ですからね。

男1 だって耳もぼんやりする。もう何もかもがぼんやりしてきたよ。

女 この先はどうなってるのかしら、ちょっと私、見て来ますね。先生ここで待っててください。

女、一方の道を進む。

男1 その先生って言い方やめてくれないかな。

女 ああ、なんとなく、この先は右に曲がってる気がするわ、なんとなくだけ。てことは…(地図を逆さまにしたりしている)。

男1 おい、ここに来て逆さまに見てるってどういことだよ。上下もわからないのか君は。

女 うん、この道は曲がってる気がする。なんとなくだけ。でもそれだとここに分かれ道は無いのよね…。

男1 住所とか電話番号とか、そういうの書いてないのかい？

女 書いてあるみたいなんですけど、途中で切れてるんです。

男1 なんだろうそれ、いい加減な会社があったもんだ。

女 先方を責めないでください、これは私が切っちゃったんです。

男1 は？

女 封を開けるときにハサミで。封筒の縁ギリギリまで書類が入ってたものだから。

男1 じゃあその切り落とした部分はどうしたんだよ。

女 わからないです、ゴミ箱に消えてしまいました。

男1 住所を切り落とすと分かった時点ですぐにゴミ箱を探せば良かったんじゃないの。

女 そんなの無理ですよ、え、ゴミ箱を漁るなんて私出来ません。

男1 なんなんだ全く、なんで君みたいな女に僕が「もう無理」とか言われたいわけないんだ、冗談じゃないよ。

女 この道、どっちが正解なのかしら。迷ったら明るくて広い道を進めと孫子の兵法に書いてあるらしいんです。でもあつちは広いけど暗いし、こっちは狭いけど明るいのよね…。こういう場合、孫子はどっちにするのかしら。ああ、悩ましいわ…。

男1、うなだれる。

と、黒い帽子を被って大きな荷物を抱えた男2が、もう一方の道からやってきた。

女 あ、すみません！

女が男2に話し掛けると、男1はそっぽを向く。

男2 ……

女 あの、私達 T市まで行きたいんですけど、道がわからなくなってしまったんです。わかりませんか？

男2 ……

女 あのお？

男2 あ、私ですか？

女 あ、はい。そうです。

男2 え、どこまで行きたいんですか？

女 T市です。

男2 P市？

女 あ、Tです、T。

男2 E？

女 Tです。

男2 D？

女 えっと、A B C D…でもなくて、もっと先の、Tです。

男2 P？

女 いやですから…、あれ、どうしてわからないんだろう。

男2 C？

女 違います。

男2 F？

女 それはもう絶対違います。Tです。もう似たような発音で残りはTしか無いです。

男2 G？

女 あの、ここに地図があるんですけど、見て貰えますか？

男2 ああ、いいです来なくて

女 でも、

男2 私、目は良い方なんです。

女 コレ、なんですけど、

男2 ああ、はいはい。

女 わかりますか？

男2 全然見えないです。

女 どうしたらいいのかしら…。

男2 でも大丈夫ですよ。大体わかりましたから。

女 大体だと困るんですよ、そもそも大体にしか書かれていない地図なので…。

男2 T市まで行きたいんですよ？

女 あ、そうです！T市です。

男2 やっぱり。この辺りに大きな街はT市しかありませんから。

女 良かった。

男2 そうでしたか、あなたずっとTって言ってたんですね、滑舌が…。

女 すみません、しっかり言ったつもりだったんですけど。

男2 イイ事教えてあげますよ。そういう時は、お茶のティーと言いたい。

女 ありがとう。

男2 T市でしたら、そのバス停で待っていたら、T市行きのバスが来ますよ。

女 ああ、ココはバス停だったんですね！

男2 私は反対側に向かうので、反対側のバスが来るのを待とうと思います。

女 そうでしたか、ありがとうございました。

女、男1の元に駆け寄って、

女 あそこ、バス停なんですって。良かったですね。これで迷わず行けますよ。

男1 あそう。

男2 T市へは、何をしに行かれるんですか？

女 仕事です。

男2 ほお、どんな？

女 私達、劇を作るんです。私は役者で、この人は演出家です。

男1 いいよそんなことまで説明しなくても…。

男2 そうですか、役者さんでしたか。

女 そうなんです。

男2 でもあなた、大丈夫なんですか？

女 何がですか？

男2 滑舌の方は。

女 Tの事ですか？

男2 P？

女 T。

男2 D？

女 (男1に) あの人の耳の方が心配です私。

男2 え？

女 いえ、頑張ります。

男2 Tが出て来ないお話だといいですね。

女 ええ、きつと出て来ないです。それに私は主役ではなくて、市民の皆さんが主役を演じる劇なんですよ。

男2 T市の人達が演じるんですか？

女 そうです、市民劇と言うやつです。

男2 それはいい！きつといい舞台になりますよ。

女 そう言って頂けると、

男2 何しろT市の人達は、良い人ばかりですからね。悪い人なんか一人も居ないんじゃない

女 いかなあ。少なくとも私は今まで会った事が無い。

女 そうなんですか、それは楽しみです。

男2 どんなお話なんですか？それはそれは良いお話なんじゃないか。

女 詳細はまだこれからなんですけど、T市の歴史や文化を活かした作品にしようとは思ってるんです。この人が書くんです。

男1 もういいってば。

男2 しかしT市はまだ、新しい街ですよ？

女 実際のお店や場所を舞台にしたお話でもいいと思ってるんです。しばらく滞在して、街の人に取材もして、台本を作ろうと考えてるんです。そういうつもりだったそうです。

男2 ああ、それは良いですね！とても良いお話になりそうです！

女 そうなるように頑張ります。

男2 何しろT市の人は、良い人達なんです。良い人達を取材したら、良いお話になるに決まっていますから。

女 そうですね、楽しみです。

男2 楽しみにしていただいていると思いますよ。その期待を超えて来るほど良い人達です。から、いや何が良い人かという一言では言えませんが、とにかく良い人達なんです。

女 もう良い人過ぎて、悪い人に見えるくらいですよ。

女 へ？

男2 ほら、熱いお湯も、熱すぎると冷たく感じるでしょう？それと同じですよ。

女 ちよつと意味がわからないんですけど、そうなんですか。

男2 いやいや本当に、良い人達なんです。それはもう間違いないですよ。しかし、あまり褒めすぎると逆に怪しいと言いますか、嘘なんじゃないかと思われてしまいますからこの辺にしておきますがね、良い人には違いないですよ。

女 わかりました。

男2 ああ、どうも上手く伝わらないなあ、どう言えはいいのやら。

女 もう充分伝わっていますよ。

男2 だって嘘みたいに聞こえてますでしょう？でも本当なんです。本当に良い人達なんです。

女 ええ、もうホントに。

男2 弱つたなあ、どうも伝わらない。しかしこれ以上言うと、余計に怪しまれてしまう。

女 嘘じゃないんだよね。嘘じゃ…。

女 大丈夫ですよ、信じてますから。

男2 ああ、あんな事を言わせてしまった、私はこれからどうしたらいいんだ。

男2 私が思う良い人は、あなたが思ってる良い人とは桁が違うんだと言う事をね、私は言

女 わかりました、わかりましたから。

男2 いいや、あなたは分かっちゃいない。

女 良い人なんですよ、桁違いに。わかりましたから。

男2 違いますよ。気持ちが伝わらない私のこのもどかしさですよ辛いのは。

女 ああ…。

男2 どうしたら伝わるんだろう、どうしたら…。

女 もういいですから本当に、早く行ってください。私達はバスを待っている。一体いつ来るんですか？

男2 私だってバスを待っているんです。このバスは、街を出て行くバスより外からやって来るバスの方が多いんです、だからそちらはすぐにやって来るでしょう。この意味、分かりますか？

女 何がですか？

男2 それくらい人気だという事ですよ。皆、T市に行きたいんです。T市に居ると、皆住みたくなるんです。ずつと居たくなるんです。

女 了解です。

男2 なぜだ、これほどの事実があるのになぜわかってもらえないのか…。

女 あのお、こちらとしても困ってしまいますよ、わかっていると云っていると全然信じて貰えないので。

男2 信じたいですよ私だって…。でも信じて貰えないじゃないですか。

女 おお、それ以上言うなら信じませんよ。

男2 ほらやつぱり、信じてないじゃありませんか。

女 信じてましたけど、あまりにもしつこいから信じるのやめました。だってそんな良い人ばかりの街なんてありますからもう信じられませんか。

男2 私のせいだ…私の…、私がT市の皆さんの評判を落としてしまった…。申し訳ないことをした…。

女 あのですね、良い人かどうかは、私は自分の目で確かめますから、もう言わないでください。

男2 あとね、さらに恥ずかしいことがありまして…、私、散々良い人だと言っておきながら、「良い人」というのはどういう人か、言いながら段々、よくわからなくなってきたんです実は。

女 え？

男2 「良い人」というのは、どういう人の事を言うのでしょうか。私には良い人達だと、思えるんですがね…、皆、礼儀正しいし、優しく、穏やかで、常に誰かの事を気にかけていて、きれいな好きで、道にはゴミひとつ落ちていない。規律正しく、バスや電車は時間通りにやってくる。私は、あんなに住みよい街は初めてなんです。

女 それは確かに良い人達の居る街ですね。

男2 ですよ？良い町に住む人達は良い人に決まっていますから。いや、良い人達が居るから良い町になった訳ですから、良い人だと、私は思うんです…。

女 あなたが良い人だと思えば、それでいいと思いませんか。誰に何を言われても、あなた自身、良い人だと思えば、それでいいじゃありませんか。バスはいつ来るんですか？

男2 そうですね、その通りかも、しれませんが。すみませんでした、どうも、意固地にな

女 つてしまつて…。

女 いいえ。それで時間通りにやって来るバスは何時に来るんですか？

男2 あなたも良い人なんですね。あなたが行けば、T市の人達も、きっと喜ぶでしょう。

何しろ良い人達ですから、悪い人が来ても、悪い人なんか居ないと思ってるくらい良い人ですから、皆平気で騙されてしまう。あなたなら安心だ。

女 いえ、私はそんな…。それでバスは？

男2 いいや、あなたは良い人ですよ。もう見ればわかります。

女 いや、そんな事はないんですけどね。バスは何時に？

男2 そんな事はないんですか？

女 まあ、偉そうに言える立場では、

男2 そうですか、じゃあ悪い人なんですね…。

女 あ、いや、そういう訳では…、

男2 悪い人は、困るな…。

女 いや、悪い人ではないんです…。

男2 でもあなたさつき、良い人ではない、と…。

女 良い人だと胸を張って言える人間ではないんですが、そこまで悪い人だとも思っていないという意味です。

男2 どういう意味ですか？

女 そのままの意味なんですけど…、

男2 悪い人は、困るんだよな…。

女 良い人です。どちらかと言えば、良い人の方です私は。

男2 どちらかと言えば？

女 いいえ、良い人です。

男2 良かった…。

女 良かったです、こちらこそ。早くバス来ないかなあ…。

男2 あなた方もきつと、T市に住みたくなりますよ。

女 あなたはどこへ行くんですか？それは旅行ですか？

男2 本当だ、おかしいなあ、ちつとも来ませぬねバス…。仕方がない、私は歩きます。T市へ行くバスが来ないので、T市から出て行くバスが来るはずありませんからね。

女 そうですか、ありがとうございます。

男2 ご存じですか？T市はね、一人の男が作ったんですよ。

女 そうなんですか。

男2 では行きますね、あなたの方の劇が観られないのは残念ですが、ごきげんよう。

女 ごきげんよう。

男2、去っていく。

女 やれやれ、面倒な人だったわ。疑り深いと言うか、自信が無いと言うか。

男1 何を言ってるんだい、自分から話し掛けておいて、自業自得じゃないか。

女 あの人、良い街だと言っておいて自分は出て行ってしまふのね。

男1 君ね、そうやって誰彼構わず話掛ける癖、ホントやめた方がいいですよ。いつかひど

い目に遭いますよ。変な男だっけ居るんですからね。

女 それにしてもバスはいつ来るんでしょう、時刻表も見当たらないの。

男3、やって来る。

黒い帽子をかぶって大きな荷物を抱えている。

女 あの、すみません。

男1 まただ…。(そっぽを向く)。

男3 はい。

女 あなた、T市から来ました？

男3 …なぜ、そんな事を？

女 あの、私達、T市まで行きたいんですが、このバスがいつ来るのかわからなくて、もし歩いて行ける距離ならば、歩こうかと思つてまして。

男3 どこにバスが来るんですか？

女 あそこはバス停じゃないんですか？

男3 どこですか？

女 あそこです(指をさす)。

男3 (そこに行き)ここが、バス停なんですか？

女 そう聞きました。

男3 こんなところが？

女 違ってますか？

男3 誰から聞いたんですか？

女 T市の人から聞きました。あ、いや、T市の人とは言つてませんでした。でもT市から来たと言つてました。いや、そんな事も言つてなかったな。あの人はどこから来たんだらう…？

男3 ははーん、騙されましたな。

女 え？

男3 おそらくその人は、T市の人ですよ。

女 ああ、そうですか。良かった。

男3 良くないです。T市の人には、嘘ばかり付きますから。

女 え？

男3 嘘つきしか居ませんよ、あそこには。

女 え、でもさつきの人、街には良い人しか住んでないって…、え、それも…？

男3 信じるかどうかはお任せしますよ。だって私もT市の人間ですからね。嘘をついてると思われても仕方がない。

女 え、だってそんな、どうしてそんな嘘をつくんですか？

男3 さあ、嘘付きの気持ちなんて、私にはわかりませんよ。奴らは皆、人間のクズですからね。

女 さっきのひとと反対の事を言ってるわ…。

男3 お二人は、夫婦ですか？

女 親子に間違われた事なら何度もあります、夫婦と言われたのは初めてです。

男3 じゃあ？

女 この人は舞台の演出家で、私は役者です。これから私達、T市に滞在して劇を作るんです。

男3 なんですって？

女 T市の人達と、良いお話を作るんです。

男3 おいおい、そんな事出来る訳がないでしょう。あんな連中に良いお話なんて…。ああ、でも奴らは取り繕うのは上手いから、良いお話っぽくするのは簡単だろうなあ。良いお話っぽいお話を、心の底から笑ってるような演技も簡単にしてしまうでしょうね。形だけの空っぽの演技で、それはそれは気色の悪い劇になります。はっはっは。悪い事は言わない、引き返した方がいい。

女 そういふ訳には行きません、仕事なんです。

男3 本当に仕事だといいですね。

女 え？

男3 私はもううんざりです、あんな街は、あなた方もすぐにはわかんと思えますよ。ここには嘘つきと、見栄っ張り、欲にまみれた人しか居ないんだなって。嘘をついてごまかして、常に誰かを貶めようと粗探しをしているくせに、体裁を整えるのだけは上手い。最低な人間の集まりです。

女 …確かに、あなたの言う通りかもしれません…。こんないい加減な地図を送って来るんですもの、どうかしてるとは思っていました…。

男3 連絡先は書いてありますか？

女 書いてあるんですけど途中で切れてるんです。

男3 やはりね、そうだろうと思つた。

女 でもこれは封筒を開ける時に私がハサミで切り落としてしまったんです。縁ギリギリの封筒に大事な書類が入ってたんです。ひどいと思います。

男3 もう諦めて帰らなさい、時間の無駄ですよ。

女 そうですね、でも行きます。

男3 なぜ？

女 もし騙されているのだとしても、「来い」と言われている以上行きます。こちらが勝手に行かないと、不誠実な方々と同じになってしまう。いざとなったらこちらから断ればいいんですもの、こちらは筋を通しますわ。

男3 そうですか…、あなたは誠実な人間ですね。

女 そうなんです、私は誠実な人間です。これからははつきり言う事にしましたよ。

男3 だったら尚更あの街に行かせる訳には行きませんか。あなた方が不幸になるのをみすみす見過ごす訳には行きませんか。

女 ありがとうございます。でも私達は行きます。行かない訳にはいけません。

男3 そうですか。じゃあ仕方がない。どうしても行くというのなら、私を倒してからに

てください。

女 倒すって、え？え？

男3 (掌を見つめて) ふんっ。

男3の掌が強く光る。

女 あなたそれなんです？手から何か出てます？ねえ、それ手から何か出てます？

男3 手から何か出ているんじゃないや、その逆です。

女 逆？

男3 手に当ててるんです照明を。それだけです。

女 え、どうしてそんな事をするの？どうしてそんな手に照明を当てるの？

男3 あなたが誠実な人間だからですよ。悪い人間なら自由に行かせます、どうなるうと知ったことじゃない。でもあなたはいい。ふんっ。

女 もうやめて、そんなに手にはかり照明を当てないで。

男3 (光るのやめて) では行くのやめますか？

女 行きます。

男3 ふんっ (光る)。

女 やめて、もう光らせないで。

男3 私だって光らせたくて光らせているんじゃない、あなたが行くと言っから光るんです。困ったわ、さっきのひとといい、どうして私を困らせるのかしら。

男3 ふんっ。

女 ああ、光ってるわ。手だけが光ってる。ヤダわ。なんだか恥ずかしいわ。

男3 そうでしょう、恥ずかしいでしょう。もつと恥ずかしいことを見せましようか？

女 いいです。もう心が痛いですが。

男3 参つたな、私も焼きが回つたようだ (光が消える)。久しぶりに優しい人間に会って、戸惑いが隠せませんよ。

女 良かったです。街にもきつと、良い人は居ますよ。諦めないで。

男3 いいえ、良い人なんか一人も居ません。あんな街…、天から降って来た何かで、どうにかなくてしまえばいい…。

女 天から降って来た何かって、なんですか？

男3 いえ…。そうですか、あなた方は行きますか…。

女 ええ。

男3 残念だ…。どうして信じて貰えないのか、私の話は、いつも。

女 お願ひ、わかってください。私は、自分の目で確かめたいだけなんです。

男3 街に三人でも、良い人が居たら、私は街を出ようなんて思わなかったでしょうね。

女 二人だったら？

男3 二人でも居たら、私は街を出ようとは思わなかった…。

女 一人だったら？

男3 一人だけだったとしても…。もうやめよう。私は心の底からあの街を憎んでいるんで

す。それは揺るがない事なんです。あまり言うと、嘘なんじゃないかと思われてしまうの  
でここでやめておきましょう。あの本当は、街を愛しているんだってね。愛情の裏返  
しで、憎んでいるんじゃないかってね。本当は、自分の手で、良くしたいんだってね。良  
くしたかったんだってね。でも出来なかったんだってね。あんなに頑張ったのにつてね。  
そうなんだってね。なんつってね。:

女 私達行つて探しますよ、良い人を。そうしたら、教えてあげますわ。だから、また帰つ  
てらっしゃいな。

男3 よしてくださいよ...、どうして、そんなに良い人なんですか。悪い人なら良かったの  
に。お願いだ、行かないでくださいよ。ね、お願いだから。

女 すみません。

男3 だって私は、あなたを愛しているんですよ。

女 急に?

男3 急ではありません。ちよつと前からそう思つてました。その人は、恋人ですか?

女 旅の最初はそうだったんですけど、途中からそうではなくなりました。

男3 だったらいいではないですか。

女 何がいいのやら。

男3 私と行きましょう。

女 行く訳ないです。

男3 どうして?

女 バカか。

男3 そうですか。

女 どうぞ行つてください。私達はバスを待ちます。

男3 こーんなどころで待つていても、バスなんか来ませんぞー。そうか、ああ、それなら  
いいの。どうぞ、ここでバスを待つてはいい。永遠に出来ないバスを待ち続けてくれたら  
いい。それなら私は満足だ。うう...:(帽子を押さえてうつむく)。

女 泣かないで。

男3 泣いてません。

女 泣いてるわ。ハンカチを(懐から出す)。

男3 結構。これは、涙じゃありませんから。

女 涙じゃないなら、なんですか?

男3 見てください。(帽子を押さえる)。

女 あら?自から出てないわ。頭の方から出ています?

男3 そうですよ。この世のどこに、頭から流れる涙がありますよ。

女 え、何してるんですか?

男3 帽子を押すと出るんですよ、お水が。

女 帽子を押すとお水が出るんですか?わ、やめてください。ねえ、やめて。濡れてしまふ。

え、どうしてそんな事するんです?

男3 それはね、どうしてそんな事をするのかと言われたいからするんです。

女 え、それはまたどうして?

男3 え、それはまたどうして、と言われたいからしてるんです。

女 うん、それはどうして?

男3 うん、それはどうして、と言われたいからするんです。

女 それもどうして?

男3 それもどうして、と...、どうですか、段々私に興味が湧いて来たでしょう。

女 ええ、興味は湧いて来ましたが、なんかちよつと怖いわ。

男3 そうでしょう。私には、まだまだあなたの知らない仕掛けがあるんです。

女 何その言い方怖い。

男3 どうですか、行きますか、一緒に。

女 まあ、どうしましょう。先生の言った通りね、私、変な人に話し掛けてしまったみたい

...。

男1 ほらみる、だから言ったじゃないか。

女 ありがどう。もういいわ。楽しかったです。さようなら。

男3 いいですか、街には行かない方がいいです。私みたいな人がたくさん居ますからね。

女 それは本当に怖い。今までの話で一番説得力がありました。でも私達は行きます。ごき

げんよう。

男3 残念です、実に、残念です。くれぐれも、街を作った男を信用しないでくださいね。ご

きげんよう。

男3、去る。

男3、去る。

女 ああ、怖かった。夢に出そう。

男1 本当にもうさ、やめてくれよそういうの...。私だってね、君に我慢して来たんですよ。

それなのにまるで自分だけが頑張つてたみたいなの言ひ方してさ、ひどいと思いますよ。あ

とさ、その地獄切つちやつた話あるでしょ。なんでいつも「途中で切れちゃつて」つて

言うの?なんで「自分で切つちやつた」先に言わないのよ?それするくない?ほんと

君つて、自分の非を認めるのが嫌いだよね。

女 ああ、うるさいわ、それどころじゃないというのに...。

男1 なんだよその言ひ方。僕は役者としてそういうところがダメだつて話をしてるんだか

らね、ちゃんと聞きなさいよ。

女 はいはい。

男1 出たよ、それ世界で一番良くないと言われている態度だからね。

女 街は本当はどういう所なんだろ...。あんな人達はかりなのかしら。さっきの人も、そ

の前の人も、どつちを信用したらいいの。

男1 もういいじゃないか、バスも来ないことだし、帰りましょうよ。

女 ...。

男1 このまま夜まで待つつもりかい?

女 また誰か来るわ。

男1 ... (うなだれる)。

女 皆歩いて来るのね、近いのかしら…。

男4もまた、黒い帽子をかぶって大きな荷物を抱えてやってくる。  
女、視線を逸らす。

男4 …。

男4、通り過ぎて行く。  
が、すぐに戻ってきて、

男4 ここで何をしているんです？

女 バスを待つてます。

男4 バス？

女 街に行くんです。

男4 街に、行く？

女 ごきげんよう。

男4 街から逃げて来た訳ではなくて？

女 逃げては来てません、これから行くんです。

男4 あなた方、街がどうなっているのかわからないんですか？

女 知らないです、まだ行った事がないので。

男4 火の海ですよ。

女 え？

男4 ついさつきです。ほんの数時間前ですよ。あつという間に街は炎に包まれました。

女 何があつたんですか？

男4 さあね…、誰かが火を付けたんじゃないんですかね。そうじゃなかったら、こんな短

時間で火の海にはなりませんよ…。

女 誰かが…？

男4 私の家も、家族も、皆燃やされました…。

女 え…。

男4 街から出る道は、この道しかないんです。つまり、街に火を放った人物は、逃げる時  
にこの道を通るはずなんです。

女 …。

男4 その事に気づいた私は、火の手が上がるとすぐに身支度をしてここまで来ました。犯人  
は一番最初に街から離れるだろうと思つてね。ここまで来る途中、私の先にも後にも誰  
も居ませんでした。ところが、あなた方が居たんです。

女 ちよつと待つててください。私達はこれから街に行くんです、バスを待つてるんですよ。

男4 ああ、そうでしたね。すみませんでした、と簡単に信じるとお思いですか？…私は、

家も家族も失つたんですよ？

女 ええ、それはお気の毒だと思ひますが私達ではありません。実は、あなたがここに来る

前、ここを通った人が居るんです…。

男4 え？！

女 二人です。

男4 ど、どっちへ行きました？どんな二人ですか？

女 この先です。一人は黒い帽子を被つていて、一人は大きな荷物を抱えていました。

男4 どうしてそれを早く言わないんだ！

男4、走り去る。

女 大変…。まさか、さっきの人が…。

男4、戻ってきて、

男4 と、簡単に信じるとお思いですか？

女 え？

男4 私は、家も家族も失つたんだよ！何度も言わせるな！何度も…。

女 だつて本当なんです…。ついさつきですよ、まだそう遠くへは行つてないと思ひますよ

…。

男4 怪しいなあ…。あなた、やたらと私を先に行かせようとしませぬ。

女 ちよつと待つててください、あなたが犯人を捜していると言うから教えてあげてるんじゃないですか。

男4 私はね、犯人は複数居ると思つてるんですよ。あんな大きな街を一瞬で燃やすなんて

無理だ。

女 もし私達が火を付けたんだとしたら、こんな所でのんびりしてませんよ。見てください、

この人座つてるんですよ？

男4 もう一度、どんな二人だったか教えて貰えますか？

女 ですから、一人は黒い帽子を被つていて、もう一人は大きな荷物を抱えていました。一

人は街を褒め称えていて、一人は街を憎んでいました。おそらく、あの街を憎んでいた人

が火を付けたんだと思ひます。でもあの人は、街の人は皆嘘つきだと言つていたのでもし

かしら最初の人かもしれません。今にして思えば、最初の人も胡散臭かったです。あんな

に街の事を好きだと言つていたのに自分を出て行くこととする。だから二人目の人を信用

したいけどちよつと気持ちの悪い人だったから。

男4 なんだろう…、良く喋るなあ。

女 だつて、どんな一人だったか特徴を…。

男4 私もちょうど、大きな荷物を持つていて黒い帽子を被つていますがね。

女 ええ、あの、私も言いながら、そう言えば二人とも大きな荷物を持つていて黒い帽子を

被つてたなつて思つてましたけど…。

男4 あなた私を見てそう言つたんじゃないですか？

女 違いますよ。たまたま一緒だったんです。なんで皆同じ格好してるんですか？あれです



か、それが街の人達の共通のファッションなんですか？

男4 まずまず怪しいなあ。

女 わかりましたよ、そんなに疑うんですしたら、この道を進んで私達、街へ行ってきますよ。

あなた歩いて来られたんですね。私達も歩きます。先生、行きましょう。

男4 だんだん怪しいなあ。

女 じゃあいいですよ。私一人で行って来ますから。先生ここに置いていきますから。

男1 は？

女 先生ここで待っていてください。

男1 は？

男4 どんどん怪しいなあ。

女 ああ、どうしてなのかしら、今日はついてない日だわ…。

男4 いいですか、私は、

女 全てを失ったんですね？

男4 そうだ！

女 そんなの私に言われても困るんですよ…。

男4 これからというところだったんです…。これから、商売を始めようと、始める矢先だったんです…。お花屋です。私はお花、全く詳しくないのですが、妻が、好きだったので…。

女 …。

男4 …。

男4 二人で、お金を貯めて、お店を持つと、そう思い始めていた矢先、こんなことになって…。妻とは、バイト先で会うはずだったんです…。ファミレスです。私の方が年上なんです。妻の方が職場では先輩で、妻が、私の指導係のほうでした。

女 …。

男4 …。

男4 私が皿を落として割ると、妻がいつも掃除してくれるはずでした。上司に頭を下げるのもいつも妻の方が先のはずです。あれは、まさにこれから、これから働こうと思って、働いてお金を貯めようと、バイト募集のアレでも見ようと、今まきに出かけるところだったんです。ほら、良くファミレスとかに置いてありますでしょうか？入口の所に置いてあるアレ、アレでも見ようと、出かけようと思っていた矢先こんなことに…。

女 …。

男4 …。

男4 本当にもう矢先だったんです。バイトでもやれば、妻とも会えるはずだったんです。

女 …。

男4 …。

男4 お花が好きで、優しい女性のはずでした。ファミレスとかに置いてあるアレを手にする時、ファミレスの店員として働いていた妻が、声を掛けてくれるはずでした。

女 …。

男4 …。

男4 それがもしかかなわなくても、あるいは家を出たものの、ファミレスまで行くのがめんどうくさくなって近所の公園のベンチに座っていたら、隣のベンチで休憩中にお弁当を食べていたのが妻だったかもしれない。

女 …。

男4 …。

男4 あるいわ家を出ようとした時、配達か何かの用で隣の家のチャイムを押していたのが

女 …。

男4 …。

男4 …。

妻だったかもしれない。

女 …。

男4 そう考えると妻はいつも、私の近くで、私の知らないうちに働いていたのかもしれない。私が部屋で昼間から寝ていた時も、朝までユーチューブを観ていた時も、妻はこっそりと働いてくれていたんです。

女 …。

男4 …。

男4 そんな妻に、もう少しで会えるところだったんです、それなのに…。

女 えつとつまり奥さんはまだ居ないと…？

男4 矢先だったんです。全ては、今日始まるころだったんです。今日から始めようと、六畳ワンドームの実際には薄板板だけと気持的には重たいドアを開けようとしていたところだったんです。まさにこれから外に出ようと、何日も洗濯していないスウェットを

今まさに脱ぎ捨て、そう、今まさに脱いでもいいかなと、脱ぐ為にちよつと立ち上がって

みよかなと、そう思っていた矢先だったんです。外から「おい火事だぞ」「おい火事だぞ」って、最初は誰に言ってるのかわからなくて、うるさいなあと思つて窓を開けると干

しっぱなしの私の洗濯物が燃えていました。下の階から勢いよく火が登つて来ていました。

…今日、全てが始まるころだったんです、それなのに、私の夢を、仕事を、家族を奪つ

た犯人を、私は絶対に許さない！

女 結局あなたは何もしなかったんですね…。

男4 ちよつとまさに、矢先だったんです…。

女 じゃあちよつと街の様子を見て来いいですか？

男4 ダメですよ。あなたは犯人かもしれないんだ。私言いますよ街の人に。これから避難する為沢山の人がここを通るでしょう。その時私言いますよ。この人が火をつけたんだって。

女 先生、今度は私悪くないですよ？だって向こうから話し掛けられたんですもの。

男4 さあどうしますか？見逃して欲しいですか？

女 見逃して欲しいとかそういう話ではなくて、

男4 見逃して欲しいなら見逃してもいい。しかしタダという訳にはいかない。だってそれは当たり前でしょう、私はお花屋さんになる夢を焼き払われたんですから。その代償は払

つていただきます。

女 …。

男4 …。

男4 犯人でもないのに払えませんし、たとえ犯人だとしても、お金を貰つて見逃すなんてそ

んなのダメですよ。

女 …。

男4 …。

男4 大丈夫ですよ、私は誰にも言いませんからお金ください。

女 …。

男4 …。

男4 私はバイトもしてないんですよ？

女 …。

男4 …。

男4 働こうと思つた矢先に働けなくなったのは誰のせいですか。

女 女のせいじゃないし、今までだって幾らでも働けたじゃないですか。

男4 …。

男4 …。

男4 …。

男4 …。

男4 …。

男4 いつ働こうと思うかは私の勝手じゃないですか。お金ください。私許しませんよ犯人を。

女 だつたら追いかけた方がいいと思いますよ。あなたがここに来る前に通つて行つた二人の人を。

男4 子供だつて居たはずなんですすよお金くださいな。

女 ただの予定でしょ、嫌です。

男4 上は男の子で下は女の子のほずでした。またこんなに小さな子供です。そんな生活が、もうすぐ始まることだつたんです。さあお金をください。

女 理想ばかり言つてないで行動してください、嫌です。

男4 あと一分遅ければ、私は家を出ていたはずなんですすお金くださいな。

女 先生助けてください。

男1 無理に決まつてるでしょう…、都合の良い時ばかり僕を頼らないでくれますか。

男4 あなたたくさんの命を奪つておいて酷いな。見逃してあげるつて言つてるじゃないですか。

女 街は今、本当に燃えているんですか？

男4 この一大事に市長の行方がわからなくなつたそうですよ。おかげで街の機能は止まつてしまつた。人々はどうしたらいいかわからなくなつてるんでお金ください。

女 市長とは、街を作つた人ですか？

男4 ええ。あの市長、この混乱に乗じて殺されたのかもしれない。支持率は異常に高かつたけど、その分、反支持者からは恨みも買つてたみたいですから、とそんな事はどうでもいからお金くださいな。

女 あ、誰か来ますよ。また黒い帽子を被つて大きな荷物を持つてる。ああいう格好している人にまともな人は一人も居ないような気がするの私だけかしら…。(男4に) ほら見てくださいあれ…、あら？

女 視線を戻すといつの間にか男4が居なくなつている。

と、男5がやつて来る。黒い帽子に大荷物を持つている。

女の存在に気づくと帽子を目深にかぶつて足早に行こうとする。

女 あ…。

男5 …。

女 街は今どうなつて居るんですか？燃えていると聞いたんですが、本当ですか？

男5 …火は、あんなに早く燃え広がるんですね…、知らなかつた。映像で見るとは大違いだ。山に移つたら大変です、ここも安全じゃない。

女 先生どうしましょう？

男1 何が…？

女 聞いてなかつたんですか？街は今、燃えているんです。

男1 燃えているつて、火事つて事…？

女 燃えているつて、火事つて事ですよ？

男5 大火事ですね。

女 大火事なんですつて。

男1 そう…。

女 あ、この道をまっすぐ行くと、街の入り口なんですすよね？本当にまっすぐで合つてまっすぐ分かれ道とか、無いですか？

男5 …。

女 先生、一度、街の入り口まで行つてみませんか？あの人が本当の事を言つてるのかどうかかわからないし。

男1 ああ…。

女 おじさん、私達、一度、街の近くまで行つてみようと思います。ご忠告ありがとうございます。

女 荷物を持つ。

男5 あなた方は、街の人じゃないんですか？

女 違います。さあ、先生。

男1 うん…。(ゆつくり立ち上がるつとする)。

男5 私の事、知らないんですね…。

女 ごめんなさい私、テレビもニュースも観ないもので。先生、ほら、何やつてるんですか。年寄りはこちらから。

男1 言うほど年寄りじゃないよ僕は。

男5 私は、T市の市長ですよ。

女 え…？！

劇的な音楽が流れる。

女 あ、アラームが…。

スマホの音楽を止める。

女 やだわ、今の会話を誰かに聞かれてたら古典的な演出だと思われそう…。

男1 アラームの選曲が独特だな…。(また座る)。

女 約束の時間になつちやいましたね…。え、市長つて、じゃああなたが街を作つた人ですか？

男5 私は今、街の人達から追われています。

女 え？

男5 街に火を付けたのは私だと、誰かが言い出して、逃げて来たんです…。言い触らした人物の検討はついています…。私がここに来る前、誰かここを通りましたよね？

女 はい、三人…。

男5 その中に居るんです、街に火をつけた人物が。私は、その人を追つて居るんです。どつ

ちに行きました？

女

男5 どつちに、行きました？

女 どうしてそんな事がわかるんですか？その中に犯人が居るって。

男5 私はね、市長をやったんですが、本当は違うんです。私はただ、言われた事をやるように言われてただけで、実際はなんにもしてなかったんです。人前に出て、話したりする時も、全部原稿が用意されて、それを覚えて話すだけだったんです。本当の市長は別に居て、その人は、絶対に人前には出て来なくて、存在も一部の人間しか知らない。その人は、ある日突然やってきて、何もなかったその場所に、町を作り出したんです。最初は何をしたんだっけかな、そうだ、発電所だ。発電所を建てたんですよ。最新の原子力発電所をね。水力発電も選択肢としてあったそうなんですが、あいにく周りに川はない。火力発電所は空気が汚れる。原子力は供給量が多くて、事故さえ起こらなければ結果的に安上がりなんだそうです。電気、ガス、水道、町づくりの基本はインフラの整備です。次に工場を作って、そこから離れた場所に住宅地を置きます。工場と住宅が近いと、住民から不満の声が上がりますからね。住宅地と工場の間にはカフェやスーパーなどの商業地を置いて、その近くには大きな公園を作りました。図書館や病院、警察署に消防署も必要です。最初はお金が掛かるんです。道を伸ばして、隣町と繋げて一気に人口を増やします。映画館や劇場、スタジアムも作って、娯楽を充実させました。町はあつという間にピレツジからタウン、タウンからシテイに昇格しました。…ええ、わかりますよ、ゲームの話みたいだと言いたいんでしょう？でも現実です。その間わずか十年です。あなたが想像しているような年寄りの政治家じゃない、まだ若いんです。若いと言っても若くないです。思ったよりも若いという印象でしょうか。その人が、火を付けたんです。そして居なくなりまして。私知ってるんです、その人がそういう事するって、そういう事いつかするだろうって予感もしてました。その人ね、凄く頭が良く、話術も上手いし、会う人全てを魅了する。もう、考えてる事、発想が凄くて、とにかく、理想も大きくて素晴らしいんですけど…、なんていうか凄く、冷酷な人なんです。だから、なんだかわからないけど、突然、何もかも捨てて、どつか行っちゃうんだらうなって、そんな気がしてたんです…。

女 つまり、その三人の中に、その人が居ると？

男5 ええ。教えてください、どつちに行きました？

女 そんな人は居ませんでした。

男5 そんなことは演技で幾らでも変えられます。人を騙すことくらい簡単なんですからあの男にとつて。

女 私達、劇を作ってるんです。

男5 それがなんですか？

女 その人が演技してるかどうかは見破れると思いますけど…。

男5 ふん、バカな事を言うんじゃないよ、そんなどき周りやってるみたいなの役者風情に見破れるもんですか。舞台が違いますよ。彼はね、もつと大きな世界を相手にしてるんですから。あなた方は所詮、虚構の世界だと知ってて観に来る優しい客を相手にしてるんです。ようっ遊んでるみたいじゃないでしょう。

女 でも私達は虚構の世界を現実にするこただつて出来ませよ。

男5 虚構が現実だった場合と、現実が虚構だった場合、これどつちが怖いと思えますか？

女 明らかに後者でしょう。

女 …ちよつとよくわからないんですけど、先生わかりますか？

男1 まつたく分らないです…。

男5 さあ早く教えてください、どちらに行つたんですか？私は、あの男を捕まえて、真実を明るみにしないといけません。じゃないと私に助かる道はない。

女 自分で作つた街に火を付けるって、どういう感覚なんですか…？

男5 さあね、単に飽きたんじゃないですか？ゲームをリセットする感覚。わからないですけど…。

女 確かに、成長していく過程は楽しいけど、ある程度のところまで成長しちゃうとつまらなくりますもんね。

男5 でもそこでは実際に生活していた人々が居るんですよ、たまたまもんじやないです…。

女 ですね…。

男5 さあ、どつちに行つたんですか？早く追いかけないと。

女 うーん…。

男5 なんですか？

女 いや…。

男5 何を悩んでるんですか？

女 あのお、今までの人を見て、ちよつと誰を信用したらいいかわからなくなって来てまして…。

男5 え、じゃあ私も信用してないんですか？

女 いや、えつと、まあ…、はい。

男5 え？え、え？は？え？

女 だつて嘘かもしれないし…。

男5 いや、ちよつと待つてください…。え、ちよ、え？

女 街を作つた男を信用しちゃいけないって、言つて…。

男5 だから私じゃないんですよ、街を作つた男は。え、それは誰が言つてたんですか？

女 ここを通つて行つた人です。

男5 じゃあその人の言う事は信用するんですか？おかしいやないですか？

女 そうなんですよね…。なんで急に関西弁？

男5 それ、どんな人でした？

女 え？

男5 その人ですよ。その人があの男ですよきつと。え、背は高くないですか？

女 え？

男5 背は、高くないですか？

女 …あれ、それって、背は「高くない」のか、「高くない？」のか、どつちでもいける質問ですよ？

男5 そんなことないですよ。え、じゃあメガネは掛けていませんでしたか？

女 わ、それも…！

男5 ちょっとなんですかもお。ねえ、よく考えてみて。どうして私がそんな嘘を付かないといけないんですか？おかしいじゃないですか。私が街を作った男なら、わざわざあなたに話し掛けたりしないですよ。

女 まあ、普通の人ならそうなんですけど、街に火を付けちゃう人ですから…。

男5 え？え？

女 私達にはわからない、独特な楽しみ方をしているかもしれないですよね…。

男5 ああ、参ったなあ…、そんな事言われたら、私はもう何も言えなくなっちゃうじゃないですか…。

女 ええ、だから…、え、どうしたらいいんだろ。先生わかります？

男1 まったく分からないです…。

女 一人目の人は、街の人は皆いい人だと言っていました…。二人目の人は、皆嘘つきだと  
言っていました。そうなる、一人目の人は嘘を付いた事になりますよね？でも、二人目  
の人も街の人だから「嘘つき」だという嘘をついてた事になりませんか？

男5 …。

女 そしたら嘘じゃないって事になるから、皆本当の事を言っている事になって、一人目の  
人は、本当に皆を良い人だと思っていて、そうすると、一人目の人は良い人じゃなくなる  
から…、あいや、良い人なんてそもそもそれぞれの見え方だから、だからいいの？か…。  
皆、本当の事を言っているの？か。じゃあ三人目の人は…、あの人はなんだかよくわから  
ない。結局何もしてない人だから。という事はあなたも、本当の事を言っている…、とい  
う事になりますね。だから道を教えてもいい、の？か。

男5 …。

女 いやいや、でもあなたの事を信用するという事は、あの三人のうちの誰かは、嘘を付い  
ていたことになるから…。唯一嘘でもホントでもどっちでもいいのは三人目の人…？いや  
いや、でもあの人が街を作ったにしては随分若いなあ…、でも見た目ほど若くないのかな  
…。え、どれくらい若いんですか？

男5 …。

女 え、本当に何もしゃべらなくなっちゃいました？わ、え？あ、なんか、すみませんでし  
た。ごめんなさい、謝りますから、なんか、喋ってください。

男5 …。

女 ごめんなさい。え、ああ、怒らせちゃった…。

男1 もう…、いいかな？

女 え？

男1、男5に近寄り、帽子を取る。  
と、それはバス停だった。

男1 君すつと、バス停に話し掛けてたよ。

女 え、え、それバス停ですか？

男1 だからやめてって言うてんのに…。もう君のそういうところホントやめて、怖いから。

女 え、そんな…。

男1 なんだよこの時刻表、文字も掠れて見えないよ…。使われてないんじゃないのかな。

女 …。

女 え、じゃあ街は…？え、なんでそんな話をしてたんだる私…。

男1 なんの話か知らないけどさ、もう陽が暮れちゃうからさ、

女 …あの、街に火を付けちゃった人が居るんですけど、居たんですけど、自分で作った街  
なのに。

男1 君の妄想の話ね。

男1、女の話には興味が無さそうに帽子を見ている。

女 はい。私その気持ちが全然わからなくて、なんでそんな事するんですかって聞いてたん  
ですけど…。あの、そういうえはなんか、私も小さい頃、ままだとして、大事にしてた人  
形ほどひどい目に遭わせたみたい、そんな事してたよなあかと思って、

男1 は？

女 毎回なんかして危機を脱するような展開には持つていくんですけど、それが遊んでい  
くうちに、より過酷な状況に遭わせたみたいになっていって、最後は燃やしちゃいました  
もん。

男1 え？

女 大事な人形だったのに…。

男1 なにそれ。

女 いや、だからなんか、

男1 思いっきり共感してるじゃないですか。

女 ええ、そうなんですよね…。

男1、帽子を被ってみる。

女 街を燃やすのは、ちょっとスケールが大きすぎてアレなんですけど…。

男1 相変わらず君の発想は独特だよ、だから面白いんだけどさ…。さて、ちょっとホント  
どうしよう、どうしますか？もう君が決めていいですよ。どうしますか？

女 …。

男1 ん？

女 もうその帽子被らないでもらえますか？なんかモヤモヤして来ちゃうんで。

男1 何言ってるんだよ…。

女 街は今、どうなってるんだらうなあ…。

男1 ねえ、どうするんですか？ねえ？

女 (道の先を見て) あ…。

男2、最初と同じように同じ道からやってくる。  
男1の被っている帽子を見ている。

男2 こんにちは。  
男1 …こんにちは。  
男2 良い帽子だなあ。  
男1 え、ああ…。  
男2 うん、良い帽子だ。もしかして、ここに掛かってました？  
男1 あ、あなたのですか？  
男2 いいえ。  
男1 ああ…。  
男2 いやね、ここに来るとね、たまに帽子が手に入るんですよ。  
男1 …え？  
男2 にしても良い帽子だなあ。  
男1 あ、差し上げましょうか？  
男2 ああ、いえいえ。もうあるんで。  
男1 ああ…。

男3、同様にやってくる。  
ちろちろと男1と男2の帽子を見る。

男2 こんにちは。  
男3 こんにちは。  
男2 (男1の帽子を) 良い帽子ですよ？  
男3 良い帽子だなあ。  
男1 あ、あげますよ？  
男3 あ、いえいえ。もうあるんで。  
男1 ああ…。  
男2 良い帽子ですよ？  
男3 良い帽子だなあ。  
男1 そんなに、良い帽子なんですか？  
男2 いやわからないんですけどね、私が見つけた奴よりは、良い帽子じゃないのかな。  
男1 あ、じゃあ…。  
男2 いやいや、もう、ええ。  
男1 じゃあ…。  
男3 いえいえ。

男4、同様にやってくる。  
三人を見て、立ち止まる。

男2 ね、良い帽子だと思ってるでしょ？  
男4 あ、ええ…。  
男2 でしょ。  
男4 良い帽子だなあ…。  
男2 でしょ。  
男1 あげますよ。  
男4 いいです。  
男1 ああ…。  
男4 もうあるんで。

男4、並ぶ。  
三人、男1の帽子を見ている。

三人 良い帽子だなあ。  
男1 いや、そんなに良い帽子じゃないと思いますけどね…。  
男2 良い帽子ですよ？  
男3・4 良い帽子だなあ。  
男1 良い帽子はこんなところに置いていかないと思うんですよ…。

男1、帽子をバス停に掛けようとする。

他 え？  
男1 あの、あれですか、皆さんの帽子も、ここで…？  
男2 私はそうなんです…。  
男3 私も…。  
男4 ええ…。  
男1 ああ…、誰がこんなに帽子を置いて行くんですかね…。  
男2 いや、そんなことよりもなんだろう…、あなたが一番良い帽子じゃないのかなあ。  
男3・4 ああ、良い帽子だなあ。  
男1 そんなに言うならどうぞ。  
男2・3・4 いやいや、あるんで。  
男1 一緒に帽子に見えるんですけどね…。

男5、同様にやってくる。帽子を被っている。  
並ぶ。

皆…。

男1 良い帽子ですか？

男5 (即) 良い帽子です。

他 良い帽子だなあ。

男1 じゃああげます。

男5 いいんですか？

男1 あ！ええ、どうぞどうぞ！

男2 お、いいなあ。

男3 いいなあ。

男4 良かったですね。

男5 ありがとう。

男5、自分の帽子を脱いで男1の帽子を被る。  
皆、黙る。

男2 なんだろう、あんなに良い帽子だったのに…。

男5 …。

男3 うーん…。

男4 なんでしょうね。

男2 あれ？さつきと同じ帽子ですか？

男1 そうですね。渡すと「見てましたよね？

男2 あれ？

男3・4 うーん…。

男5 お返しします…。

男1 …。

男1、被る。

男2 やっぱ良い帽子だなあ。

男3・4・5 良い帽子だなあ。

男1 私普段、帽子そんなに似合わない人なんですけど…。

男2・3・4・5 良い帽子だなあ。

女 あのお…。

男達 はい？

女 あ、そんな、いいです、一斉にこつち見なくても。

男達 え？

女 あの、街は今、どうなってますか？

男2 あなた、街に行くんですか？

女 ええ、そのつもりだったんですけど…。

男3 一人で？

男1 あ、私の連れです。

男1、女の元に。

男4 街には、今は…、ねえ？

男5 そう、ですね…。

女 え、どうなってるんですか？

男2 バス、来ませんね。

男3 来ませんね…。

女 え、街はどうなってるんですか？

男2・3・4・5 …。

女 ねえ、街は…？

風が吹いた。  
溶暗。

〜終〜

この戯曲の著作権は、作者である平塚直隆にのみ帰属するものです。  
上演許可あるいはその他のお問い合わせは、作者の所属する「オイスターズ」どうぞ。

■ オイスターズ ■

ホームページ

<https://oysters.official.jp>

メールアドレス

[theatrical\\_unit\\_oysters@yahoo.co.jp](mailto:theatrical_unit_oysters@yahoo.co.jp)